

第五章 教育論

今日、青少年の脱線、性道德の退廃、校内暴力事件の頻発などに見られるように、民主主義社会の教育は危機に瀕しています。しかし、このような混乱を救う教育理念は見当たらず、今日の教育は方向感覚を失っています。師弟の道も崩壊しており、生徒は先生を尊敬せず、先生は権威と情熱を失っています。その結果、先生は知識を売り、生徒は知識を買うというような関係になっており、学校は知識の売買場にまで転落する傾向が見られるのです。このような状況に共産主義が大学界に浸透し、学内を争乱の場とさせてきたのです。

民主主義の教育理念とは、主権在民、多数決主義、権利の平等などの民主主義の原則を守りながら、他人の権利を尊重し、自己の責任を果たし、その上で自己の権利を主張する市民、すなわち民主的市民を養成することであるといえます。

ところでこのような教育理論に対して共産主義者たちは次のように攻撃したのです。階級社会において、支配層が労働者や農民の権利を尊重しうるのであるか。階級社会において義務と使命を果たすとは、権力層の忠実な僕となることではないのか。それは真なる民主主義ではない。真なる民主主義とは、人民大衆である労働者や農民のための民主主義、すなわち人民民主主義であるということです。したがって真なる民主主義教育は人民のための教育でなくてはならず、真なる教育を行うためには資本主義社会を打倒し、社会主義社会を建設しなくてはならないと、宣伝したのです。

共産主義のこのような讒訴は資本主義社会における搾取、抑圧、不正、腐敗などの社会的構造が残っている限り、説得力を失わないでしょう。したがって、なんとしても、このような社会悪を除かなければならないのです。そのためには神様の真の愛を基盤とした、新しい価値観運動が展開されなくてはならず、新しい教育理念が確立されなくてはならないのです。

新しい教育理念は、人間の成長に対して本来神様が願われた基準を根拠として立てられなければなりません。それは混迷した今日の教育に方向性を提示し、未来社会に対して教育のビジョンを提示しうるものでなければなりません。すなわち、来たるべき未来の理想社会に対備するための教育論でなければなりません。本教育論(統一教育論)はまさにそのような教育論として提示されるものなのです。

ところで教育理論には二つの側面があります。一つは教育の理念、目標、方法などに関するもので、いわゆる教育哲学がそれにあたります。他の一つは、客観的な立場で教育現象を扱うものであって、教育科学がそれにあたります。教育課程(カリキュラム)、教育評価、学習指導、生徒指導、教育行政、教育経営などを研究するものです。

教育において、この二つの側面は、性相と形状の関係にあります。つまり教育哲学は性相的教育学であり、教育科学は形状的教育学であることができます。ところが今日、教育科学が科学尊重の潮流の中で大きく発展したにもかかわらず、教育哲学は軽視され、衰退しています。今日の教育が方向感覚を失っているということは、とりもなおさず教育哲学の不在を意味します。したがって、今日、切に要求されているのは、新しい教育哲学の確立なのです。統一教育論はまさにそのような容貌に答えるものなのです。

一 「統一教育論」の原理的根拠

(一) 神様への相似性と三大祝福

神様はご自身のかたちに人間を創造されました(創世記 1/27)。そして創造が終わると神様は人間に「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ。海の魚と、空の鳥と、地に動くすべての生きものを治めよ」(創世記 1/28)という祝福(三大祝福)を与えられました。それが教育の根拠となります。すなわち教育とは、神様に似るように子女を愛育せしめることであり、子女が神様に似るように導く努力なのです。神様に似るとは、神相と神性に似ることをいいます。人間

は生まれながらにして、神相(性相と形状、陽性と陰性、個別相)をもっていますが、それは極めて未熟な状態にあるのであり、成長しながら次第に神様の神相に似てゆくのです。神性の場合にはなおさらそうです。それで神様に似るとは、神相においては、神様の性相と形状、陽性と陰性、個別相に、神性においては、神様の心情、理法、創造性に似るようになることを意味します。

神様が人間に与えた祝福において「生めよ」(be fruitful)とは個体の人格を完成せよという意味であり、「ふえよ、地に満ちよ」とは、夫婦になって子孫を繁殖しなさいという意味であり、「地を従わせよ……すべての生きものを治めよ」とは、万物を主管せよという意味です。この三大祝福を成就することによって、人間は神様の神相とともに、神様の神性つまり心情、理法、創造性を受け継いで、完全性、繁殖性、主管性において神様に似るようになるのです。次に完全性、繁殖性、主管性に関して具体的に説明されています。この三大祝福において教育の理念が立てられるためです。

完全性

イエス様は「あなた方の天の父が完全であられるように、あなた方も完全な者となりなさい」(マタイ5/48)と言われました。これは神様の完全性に似なさいということです。完全性とは性相と形状の統一のことをいいます。神様において性相と形状は主体と対象の関係において、心情を中心として円満な授受作用を行い、合性一体化をなしています。この状態が完全性なのです。

したがって神様の完全性に似るということは、人間においても、心情を中心として性相と形状が一つになることを意味します。存在論で述べられているように、人間と性相と形状には四つのタイプがありますが、ここではそのうちの生心と肉心のことをいいます。生心と肉心が一つになるためには、生心が主体、肉心が対象にならなければなりません。すなわち生心が肉心を主管しなければならないのです。生心は真美善の価値を追求し、肉心は衣食住および性を追求します。したがって生心と肉心が一つになるとは、真美善の生活を第一的に、衣食住の生活を第二的に追求することを意味するのです。

生心と肉心の授受作用の中心は心情であり、愛です。結局、愛を基盤とした真美善の生活を中心にして、衣食住の生活が営まれなければならないのです。それがすなわち神様の完全性に似ることなのです。人間は幼い時には、真美善の価値はよく分かりませんが、成長するにつれて、次第に心情が発達して、愛を中心とした生活を真なる生活、美なる生活、善なる生活をするようになります。そうして次第に神様の完全性に似てゆくようになるのです。

ところで人間は霊人体と肉身の二重的存在ですので、人間の成長には霊人体の成長と肉身の成長があります。人間に与えられた「生育せよ」という第一祝福は、肉身の成長の意味もありますが、主として霊人体の成長すなわち心霊基準の向上を意味しているのです。しかし霊人体も肉身を土台にして、すなわち肉身との授受作用によって成長するのです。そのようにして成長すれば神様の完全性を相続させるということなのです。したがってこれは第一の予約祝福なのです。

繁殖性

次は神様の繁殖性に似るということ、すなわち人間が子女繁殖の段階にまで成長することです。それは神様が陽性と陰性の調和体であるように、その陽性と陰性の調和に似ることなのです。人間における陽性と陰性の調和とは夫婦の調和をいいます。神様の属性である性相と形状の授受作用(統一)と、陽性と陰性の調和によって人間が創造されたのですが、それは神様の繁殖性によるものなのです。それで人間も心と体の統一と陽性と陰性の調和によって、子女を繁殖するのです。

神様に繁殖性に似なさいというのは、神様のように陽性と陰性が円満な授受作用をなすことのできる能力を備えなさいということの意味です。それは一人の男性と一人の女性が結婚して子女を繁殖する資格を備えるように成長しなさいという意味です。すなわち男性は男性としての資格を完全に備え、女性は女性としての資格を完全に備えなさいということなのです。言い換えれば、夫としての道理、妻としての道理を果たすことができる段階にまで成長しなさいということなのです。そしてそのような資格を備えるようになったならば、結婚して子女を繁殖しなさいということなのです。したがってこれは第二の予約祝福です。

主管性

さらに人間は神様の主管性に似なければなりません。主管性に似るということは、神様の創造性に似るとのことなのです。神様の創造性とは、心情(愛)を中心として対象(新生体)をつくる能力をいいます。神様はその創造性をもって人間および万物を創造し、主管されようとしたのです。本来、人間はそのような神様の創造性を与えられているのです。したがって人間は、心情を中心として万物を主管するようになっているのです。すなわち人間は成長すればそのような能力を備えるようになるのであり、それが第三の予約祝福です。

すべての産業活動も万物主観です。例えば農民は田畑を耕すが、それは人間の土地に対する主管です。労働者は工場で機械を用いて原料を製品にしますが、それは機械や原料に対する主管です。また漁業は海や魚に対する主管であり、林業は山や木に対する主管です。

万物を主管するということは、万物に対して創造性を発揮することです。創造性を四位基台の側面から見れば、内的四位基台と外敵四位基台を形成する能力をいいます。したがって農業においては、農民はアイデアに基づいて創意的に、さらに多くの収穫をあげようと努力するのです。商業においてもアイデアと創意がなければ成功できません。要するに農業、鉱業、工業、商業、林業、漁業などは、みな人間の創造性発揮の対象であり、万物主管の営みなのです。科学や芸術も万物主管の範疇に入ります。さらに社会を主管すること、すなわち政治も万物主管の中に入ります。

ところが、人間は墮落によって神様の創造性を受け継ぐことができなかつたのです。神様の創造性は心情を中心とした創造性ですが、墮落のために、心情を中心としないで、利己心を中心とした創造性になってしまったのです。そのために人間は、そのような自己中心的な創造性でもって、社会や自然に被害を及ぼすことが多かつたのです。戦争の武器の生産だとか、公害の増大などが、その例です。したがって教師は新しい教育論の立場から、学生たちが心情を中心とした創造性を発揮するように、すなわち神様の主管性に似るように導かなくてはならないのです。

(二) 人間の成長過程

人間は神様に似るように造られましたが、生まれるとすぐに神様に似るわけではありません。神様に似るようになるためには、一定の成長期間がなければなりません。被造世界は時間・空間の世界であるためです。それで人間は蘇生、長成、完成の三段階を経過して成長して、初めて神様に似るようになるのです。すなわち完全性、繁殖性、主管性において神様に似るようになるのです。したがって成長とは神様に似てゆく過程ですが、それは神様の人格的な側面と神様の陽陰の調和の側面、おっして神様の創造性に似てゆく過程のことをいうのです。

神様が人間に与えた三大祝福とは、人間が成長したとき、神様の完全性、繁殖性、主管性を相続するという意味の祝福なのです。ですので三大祝福は三大予約祝福なのです。ところが人間始祖の墮落によって、人間に与えられた三大祝福は成就されなかつたのです。この三大祝福は創世記に書かれているように「……せよ」という命令形式の祝福です。たとえ人間が墮落したとしても、神様の命令が取り消されたのではなく、命令(祝福)それ自体は今日まで有

効なのです。これは天意が人間の潜在意識を通じて、三大命令すなわち三大祝福を成就するように働きかけてきたことを意味します。それで人間は、無意識のうちにも、三大祝福を実現する方向に努力してきたのです。すなわち墮落社会にあっても、人間はみな我知らず、そのような天意に従って、たとえ不十分であるとしても、人格的に成長し、良い相手を見つけて家庭を築き、自然を支配し、社会を改善しようと努力してきたのです。人間に成長欲、結婚欲、支配欲、改善欲などがあるのはそのためでもあります。そうであるとしても、そのような欲望は今日まで完全には達成されなかったのです。それは人間始祖の墮落のためでした。

このように本然の世界では、人間は三大祝福を完成するために成長してゆかなければならないのです。人間以外の万物も成長しますが、万物の場合、原理自体の自律性と主管性によって成長するようになっています。生命の赴くままに任せておけば、自然に成長するのです。ところが人間の場合、肉身は万物と同様に原理自体の自立性と主管性によって成長しますが、霊人体の成長はそうではないのです。霊人体は責任分担を全うすることによって成長するようになっているのです。人間に責任分担が課せられているのはそのためです。責任分担によって成長するとは、人間が自らの責任と努力によって人格を向上させていくことを意味します。したがって人間は自由意志によって規範(原理)を守りながら、神様の心情を体恤するように努力しなければならないのです。

人類始祖であるアダムとエバは、神様の戒めを守りながら成長して、神様の心情を体恤したあと、夫婦となり、神様の真の愛を実現しなければなりません。そしてアダムとエバは全人類を代表した最初の人類の先祖とならなくてはなりませんので、彼らには自己の責任分担のみならず、後孫の責任分担の大部分までも担わされていたのです。ですので、神様は、アダムとエバの責任分担には絶対干渉されなかったのです。

アダムとエバが神様のみ言を守りながら、自らの力でそのような厳しい責任分担を全うしていたならば、その子孫たちはいたって少ない責任分担だけで、すなわち父母の教えに従順に従うだけで完成できるようになっていたのです。そのような内容のためにアダムとエバの場合は、誰かの助けを受けることなく、純粹に自分たちの責任だけで三大祝福を完成しなければならなかったのです。ここでアダムとエバが完成したのちに、子女が父母の教えに従順に従うということは、父母の教え、すなわち父母の教育を受けなければならないことを意味するのです。

ここに父母の子女に対する教育の必要性が生じます。子女が果たすべき責任分担のために父母による教育が必要なのです。ここに教育の理念が立てられるのです。すなわち、父母が子女を教えて三大祝福を完成できるように導くというのが教育の理念になるのです。したがって教育の本来の場は父母が常に住んでいる家庭でなくてはならないのです。しかし文化の発達とともに、情報量や教育内容が増大するようになり、現実的には不可能なので、教育の場は必然的に家庭から教育を専門にする学校へ移るしかありませんでした。その代わり、学校では先生は父母の代わりに教育するのです。したがって教師は父母の心情で、父母の代身として学生を教えなければなりません。それが本来の教育のあり方なのです。

(三) 教育の三大理念

統一教育論において、教育の目標とは、被教育者が神様の完全性、繁殖性、主管性に似るようにせしめるということです。それが統一教育論の理念となります。

ここで神様の完全性に似るといことは、個体完成(個性完成)をいいます。個体完成は第一祝福の完成であり、人格の完成をいいます。また繁殖性に似るとは家庭完成をいいます。これは男性と女性が将来、結婚して、夫婦の調和を現し、円満な家庭を実現することをいいます。すなわち第二祝福の完成をいいます。そして主管性に似るとは主管性完成をいいます。これは万物の主管のために神様の創造性に似ることをいいます。すなわち第三祝福の完成をいいます。

このように統一教育論における教育の理念は三大理念からなりますが、それは第一祝福の完成のための個体完成(個性完成)、第二祝福完成のための家庭完成、そして第三祝福完成のための主管性完成をいうのです。

二 教育の三形態

このような理念を基盤とするとき、人間にはいかなる教育が必要なのでしょう。個体完成のためには心情教育が必要であり、家庭完成のためには規範教育が必要であり、主管性完成のためには技術教育、知識教育、体育などの主管教育が必要です。次のこの三つの教育の形態について説明されています。

(一) 心情教育

個体完成のための教育

神様の完全性に似るようにする教育が心情教育です。神様の完全性に似るとは、性相と形状の統一性に似ることであり、それは生心と肉心が主体と対象の関係において授受作用を行って、一つになった状態をいいます。神様において、性相と形状は心情を中心にして授受作用を行っており、統一をなしています。したがって生心と肉心が一つになるためには、心情が生心と肉心の授受作用の中心にならなければなりません。心情が生心と肉心の中心になるためには、神様の心情を体恤して、個人の心情が神様の心情と一致しなければならないのです。個人の心情が神様の心情と一致するようにする教育を心情教育といえます。ゆえに心情教育が個体完成のための教育となるのです。

心情教育とは、言い換えれば、神様が人間を愛するように、子女を万民や万物を愛しうような人間に育てる教育です。そのように人間に育てるためには、子女が神様の心情を体恤するようにさせなくてはなりません。それでは、子女はいかにして神様の心情を体恤するようになるのでしょうか。そのためにはまず神様の心情を理解させなければなりません。

神様の心情の表現形態

神様の心情は創造と復帰の摂理を通じて三つの形態に表現されます。すなわち希望の心情、悲しみの心情、苦痛の心情です。

①希望の心情

希望の心情とは、宇宙創造における神様の心情であって、無限の愛を注ぎうる最愛の最初の子、アダムとエバを得る期待と希望に満ちた喜びの感情をいいます。その希望の心情が達成されたとき、神様はいうことのできない満ちに満ちた喜びを感じるのです。実際にアダムとエバが生まれたとき、神様の喜びは表現することのできない満ちに満ちた喜びだったのです。

最近の物理学によれば、約百五十億年前に宇宙は生成し始めたということです。これは統一思想から見ると、約百五十億年前に、宇宙が創造され始めたということです。神様がそのように長い時間をかけて、宇宙を創造された理由は何だったのでしょうか。それは最愛なる子女、アダムとエバを創造されるためでした。その子女を得る一時を望みながら、神様はいかなる苦勞もいとわず、そのような長い時間をかけながら宇宙を創造されたのです。希望に満ちた神様は、宇宙創造の過程がいかに長く、困難であろうとも、それが長いとか、苦しいとは感じられませんでした。

そのような事実を私たちは経験を通じて知ることができます。すなわち、喜ばしい結果を期待しながら仕事をする時には、いくら苦しさや予想されても実際にぶつかってみると、それほど苦しさを感ぜないだけでなく、その期間が早く過ぎていくのです。それは喜びが近づいているという希望があるからです。喜びの結果に対する神様の期待は、私たち人間が経験するものより、はるかに大きいものでした。そして実際に、アダムとエバが生まれたとき、神様の喜びはたとえ

ようもなく大きく、深いものだったのです。

② 悲しみの心情

悲しみの心情とは、アダムとエバが墮落し、死亡圏内(サタン of 支配下)に落ちた時の神様の心情をいいます。子女を失って悲しむ父母のような神様の感情をいうのです。教会の初創期に、文先生はアダムとエバの墮落に及ぶと、その時の神様の悲しい心情を紹介しながら、いたく通哭されたのです。

アダムとエバが墮落した直後から復帰摂理が始まったのですが、そのとき神様は、未来にみ旨が実現される、その喜びと希望の世界を見つめながら摂理を進めてこられたのです。ところが墮落した人々は、自分たちはそのような神様の摂理にはかかわらないといって、退廃と暴力を続けてきたのであり、神様はそのような光景を見つめながら、その度に嘆き悲しまれたのです。そのような歴史を摂理してこられた神様は、悲しみの神様であると同時に恨の神様でした。創造の時の期待と希望があまりにも大きかったために、墮落によってもたらされた神様の失望の悲しみは、それだけに、さらに大きかったのです。

この世においても、愛する子供が死ぬとき、父母は、そしてとりわけ母は非常に悲しみます。たとえ子供の病気が重くて、不治の病であると宣告されても、そしてついに子供の息が絶えても、悲しみのために、どうしていいかわからないというような母が少なくないのです。アダムとエバが墮落した時の神様の悲しい心情と、監獄のようなサタンの世界において苦勞するアダムとエバとその後孫たちの姿を見つめておられる神様の悲しみの心情は、子供を失った、この世の父母の悲しみとは比較することができないほど大きなものでした。歴史が始まって以来、神様のように悲しまれた人間は、かつてこの世にいなかったというのが、文先生が語られた神様の心情の一つの姿でした。

③ 苦痛の心情

苦痛の心情とは、復帰摂理を進める過程において、復帰摂理の中心人物たちがサタンとその手先たちから迫害され、苦しんでいるのを見つめる神様のつらい感情のことをいいます。神様は墮落した人間を捨てないで、再び生かすために預言者や聖賢たちを送られたにもかかわらず、人々は彼らの教えに従わないで、むしろ彼らを迫害し、時には虐殺するようにまで及んだのですが、そのような光景を見られるたびごとに、神様の胸は釘が打ち込まれ、槍で突かれるような痛みを感じられたのです。

彼らは墮落世界の人間を何としても救おうとして神様が送られた聖賢、義人たちでした。したがって、彼らが受ける蔑視、嘲笑、迫害、賤しめなどは、まさに神様御自身に対して与えられたものなのです。そのように復帰摂理路程における神様のもう一つの心情は苦痛の心情だったのです。

神様の心情の理解

心情教育のためには、このような神様の三つの心情を被教育者に理解させなければなりません。特に復帰路程における神様の心情を教えることが重要です。そこで参考として、アダム家庭、ノア家庭、アブラハム家庭、モーセ路程、イエス路程など、復帰路程に現れた神様の心情を紹介することにします。以下は文先生が紹介された神様の心情に関する内容です。

① アダム家庭における神様の心情

希望の中でアダムとエバを創造された神様は限りない希望と喜びでいっぱいでしたが、アダムとエバが墮落したので限りなく悲しまれたのです。そこでアダムの家庭を救うために、アダムとエバの子供であるカインとアベルに献祭をさせたのですが、そのとき神様は彼らが献祭に成功するだろうという大きな希望をもって臨まれたのです。

神様は全知全能なので、アダムとエバや、カインとアベルが失敗するということは、初めから分かっていたのではなからうか。そうであるならば、神様が嘆き悲しむようなことがありえるので

しょうか。そのように考える人がいるかもしれませんが、しかし、そうではないのです。

神様はたとえ人間が墮落することもありうる可能性を知っていたとしても、神様は心情の神様であり、希望の神様であるために、墮落しないことを願う心が墮落の可能性を予知する心に対して、比較できないほど強かったのです。

献祭においても同じです。献祭にかけた神様の期待は大きく、希望は強かったために、献祭の失敗の可能性に対する予知は完全に忘れてしまっていたのと同じだったのです。ここに心情と理性の違いがあります。心情の衝動力は理性を圧倒するほど強力なのです。

そのようにアダムとエバの時も、カインとアベルの時も、神様は成功のみを願う、期待と希望の神様だったのです。ところがアダムとエバも、カインとアベルも失敗してしまっただけです。その悲しみは例えようもなく大きかったのです。ここに指摘することは、神様はその悲しみを外に表されなかったという事実です。それはそうした場面ごとに、サタンが共にいて注視していたからです。もし神様が悲しみを表したとしたら、悲しみにぬれたその姿はサタンにとって、威信も権威もなく、神らしくない、みすぼらしい姿として映るだけだからです。それゆえ神様はただ黙して、顔を伏せて、わき上がる悲しみを抑えながら、悲壮な面持ちでその場を立ち去られたのです。これが、草創期に文先生が明らかにされたアダム家庭における神様の心情なのです。

②ノアの家庭における神様の心情

アダムの家庭を離れられた神様は、千六百年という長い間、荒野の道を歩きながら、地上の協力者を探してさまよわれたのです。その間、人間はみな神様に背を向けるばかりで、誰も神様を迎える者がいなかったのです。したがって、地上には神様が宿ることのできる一軒の家もなければ、立つことのできる一寸の土地もなく、相対することのできる一人の人間もいなかったのです。文字通り天涯孤独な哀れな身の上となって、寂しい道を歩まれたのです。そういう中で、ついに神様は一人の協力者、ノアに出会ったのです。その時の神様の喜びは例えようがありませんでした。しかし神様は摂理的な辞讓の為に、愛するノアに対して厳しい命令を与えなければならなかったのです。それがまさに方舟をつくれという命令でした。神様の命令を受けたノアは、人々からあらゆる嘲笑と蔑視を受けながら、あらゆる精誠を尽くして、百二十年間、方舟を造ったのです。

ノアは神様の前に立てられた僕であり、義人であっただけで、神様の子女ではありませんでした。しかし、たとえ僕であっても、神様はそのようなノアに出会ったことを、それほどまで喜び、神様自ら、僕の立場に下りてノアと共に苦労の道を歩まれたのでした。

ところが洪水審判を経たあとに、ノアの子ハムが責任分担を果たさなかったために、洪水審判で生き残ったたった一つの家族であるノアの家庭にサタンが侵入する結果となってしまったのです。そのとき神様は胸が張り裂けるような痛みと悲しみを感じながら、再び悄然としてノアの家庭を立ち去られたのでした。

③アブラハム家庭における神様の心情

その後、四百年を経て神様はアブラハムを探し立てられました。アブラハムの路程において一番深刻だったのは、アブラハムが百歳の時に得た、ひとり子イサクを供え物として捧げる時でした。鳩と羊と雌牛を捧げる象徴献祭に失敗したアブラハムに対して、神様は息子のイサクを供え物として捧げよと命令されたのです。そのとき、人倫に従って子を生かすべきか、天命に従って子を捧げるべきか、人倫か天倫か、アブラハムは苦しんだのです。イサクを捧げる代わりに、自分自身を供え物にして、イサクを生かしたいというのがアブラハムの心情でした。けれども彼は結局、神様の命令に従ってイサクを供え物として捧げようとしたのです。人倫を断ち切り、天倫に従うことを決意したのです。モリヤ山に向かって行く三日間の期間は、アブラハムにとっては、天倫か、人倫か、いずれかを選ばなくてはならない苦悩の時でした。その時神様は遠くからただ眺めておられたのではありませんでした。「子を捧げよ」という厳しい命令を発してからは、アブラハムの苦しむ姿を見られながら神様はアブラハムと共に、いえ、それ以

上に苦しめられたのです。

アブラハムはモリヤ山で最愛のイサクを祭物として捧げようと、刀を取って殺そうとした時、神様は慌ててアブラハムがイサクを殺すのをやめさせ、「あなたが神様を恐れる者であることを今知った」(創世記 22/12)といわれたのでした。

そのとき、アブラハムの神様のみ旨に対する心情と、神様に対する絶対的な信仰と従順と忠誠は、すでに彼をしてイサクを殺したという立場に立たせたのです。したがってイサクを殺さなくても殺したのと同じ条件が成立したのです。それで神様はアブラハムにイサクを殺すのをやめさせ、その代わりに雄羊を燔祭として捧げさせたのです。「あなたが神様を恐れる者であることを今知った」というみ言の中には、象徴献祭に失敗したアブラハムに対する神様の悔しさと、イサク献祭において見られたアブラハムの忠誠に対する神様の喜びが、共に含まれていたのです。

④モーセの路程における神様の心情

エジプトの王子として育てられたモーセは、同胞であるイスラエル民族の受けている苦痛の現場を目撃したあと、神様のみ旨に従って彼らをカナン之地へ復帰させようとして、千辛万苦ののちに、彼らを荒野に導いたのでした。しかしイスラエル民族は困難にぶつかるたびに指導者であるモーセに反逆したのでした。モーセがシナイ山で四十日間の断食を行ったのち、二枚の石板を受けて山から降りて見ると、イスラエル民族は金の子牛を造って拝んでいたのです。モーセは、そのような神様を冒瀆する不信の行為を見て激しく怒り、石板を投げつけて壊してしまったのです。そのとき神様は「わたしはこの民を見た。これはかたくなな民である。それで、私をとめるな。わたしの怒りは彼らにむかって燃え、彼らを滅ぼしつくすだろう。しかし、わたしはあなたを大いなる国民とするであろう」(出エジプト記 31/9-10)といわれたのでした。

そのとき、モーセの心情はいかなるものであったのでしょうか。イスラエル民族の不信をしかって、「この民族を滅ぼしつくそう」という神様の怒りに直面して、瞬間的に彼の民族愛、愛国の心情がほとばしったのです。そして彼はいかなる困難があろうとも、この民族を生かしたいと思い、できれば彼らとともにカナン之地に入ろうとしたのです。そこで彼は神様にすがりついて、「どうかあなたの激しい怒りをやめ、あなたの民に下そうとされるこの災いを思い直し……」(出エジプト記 32/12)といいつつ、民族を救おうと哀願したのでした。神様はモーセのそのような民族愛の訴えの祈りを受け入れて、ついにイスラエルを滅ぼすことを思いとどまれたのでした。

ところが四十年間、荒野を流浪したあと、カデシバルネアに到着した時、イスラエル民族は「ここは食べるものがない」と再びモーセを恨んだのでした。その時、モーセは不信するイスラエル民族に対する怒りから、一度打つべき岩を二度打ってしまったのです。これは神様のみ旨に反することでした。そしてその後、神様はモーセをピスガ頂きと呼んで、イスラエル民族が入って行くかカナン之地を見せながら、「あなたはカナン之地に入ることはできない」(申命記 32/52)と告げられたのでした。八十歳の老いた体を駆って、四十日間の断食を二回も行ったモーセ、不信の民族をかかえて四十年間もシンの荒野で苦勞をしてきたモーセでした。事実上、出エジプトの主役であったモーセをカナン之地に導き入れたい神様でしたが、サタンの讒訴のために、やむを得ず目前にあるその地を見せながら彼を見捨てるしかなかったのです。そこに神様の悲しみ痛みと切なさがあったのです。

⑤イエス様の路程における神様の心情

旧約聖書に予言されていたように(イザヤ書 9/6)、イエス様は地上にメシヤとして来られました。全地が諸手を挙げて歓迎しなければならぬ救い主であったにもかかわらず、イエス様は幼い時から排斥されました。家族がイエス様を追い出し、ユダヤ教がイエス様を不信し、結局、イスラエル民族がイエス様を追い出したのです。どこにも行くところがないイエス様でした。

イエス様は三年間の公生涯路程を含めて三十三年間、寂しい孤独な生涯を送られたのです。「きつねは穴があり、空の鳥には巢がある。しかし、人の子にはまくらす所がない」(ルカ 9/5

8)といわれ、その孤独な心情を吐露されたのです。そしてエルサレムの城を眺めて涙を流しながら、「城内の一つの石も他の石の上に残して置かない日が来るであろう。それは、おまえが神様のおとずれの時を知らないからである」(ルカ 19/44)といて、イスラエル民族を叱責されたのです。

ある時には、ガリラヤの浜辺をさまよいながら、選民ではないサマリヤの女に話しかけたりして寂しさを紛らせた(ヨハネ 4/7-26)、ユダヤ人の指導者たちより酒税人や遊女たちが先に天国に入るであろうと(マタイ 21/31)、救い主である自分を追いやる教団に対して寂しさを告白されたのでした。そのとき、神様もイエス様と共に、孤独な道を歩まれたのでした。

そしてついに十字架にかけられた、神様のひとり子イエス様の悲惨な姿を見られる神様の心情は、いかなるものであったのでしょうか。あまりにも悲惨な姿を見るに忍びず、そして十字架からイエス様を下ろすことのできない事情を嘆きながら、神様は顔をそむけられたのです。イエス様の十字架を見ておられる神様の苦しみは、イエス様の苦しみ以上であったのです。

神様の心情の紹介

以上はすべて草創期に文先生が、説教のたびに泣きながら紹介された内容です。すなわち、アダム、ノア、アブラハム、モーセ、イエス様における神様の心情だったのです。そればかりでなく、その他の宗教や民族における聖賢、義人たちの受難の路程の背後にも、彼らを導いた神様の心情があったのです。心情教育において、このような神様の心情を父母や教師が子女や生徒に知らせなくてはならないのです。直接話して聞かせるだけでなく、テレビ、ラジオ、映画、ビデオや、小説、演劇、絵画などの作品を通じて教えることができます。

実践を通じた心情教育

神様の心情を言葉で教えるだけではなく、愛の実践を通じて直接、見せてあげることも必要です。そのためには、まず家庭において父母が子供を真剣に愛さなければなりません。食べさせ、着せ、住まわせる、礼節を教えることなど、子供を育てるのに常に真心をもって温かく愛さなければなりません。それが父母が子供に与える真の愛なのです。このような愛を父母が子供に与え続けたとしたら、子供たちは父母を心から尊敬し、親孝行するのはもちろんのこと、子供たちも互いに愛し合うようになるのです。神様の心情が父母の真の愛の実践を通して子供たちに伝えられるからです。

学校教育の場合も同様です。教師は言葉や行動の実践を通じて、神様の真の愛を見せなければなりません。科目ごとに真心を尽くして教えるのはもちろん、生徒一人一人に対して自分の子供のように、父母の心情をもって真心を尽くして導かなければならないのです。学校教育は家庭教育の延長であるためです。

教師の日常の言動にも神様の愛が込められなければなりません。先生の公私の生活における一言一言、行動の一つ一つが生徒たちにとって、すべて学ぶ教材となり、人格形成の素材となるからです。そのような愛がみなぎる学校教育を受けると、生徒たちは深く感動し先生を尊敬し、従うようになるのです。そして、そのような先生に似た真の愛の実践者になろうとします。以上が、家庭と学校における実践を通じた心情教育です。

(二) 規範教育

家庭完成のための教育

家庭完成のための教育とは、一人の男性とひとりの女性が夫婦となったとき、神様の陽陰の調和に似るようにするための教育であり、本然の夫婦となれる資格を備えるための教育です。人間墮落が規範(神様の戒め)を守らなかったことにあったので、この教育はまず神様の戒めを守るようにするための規範教育です。規範教育は夫婦となって家庭を形成する資格を備え

るための教育です。男性は夫としての道理を、女性は妻としての道理を身につけなければなりません。また家庭における父母と子女の本来のあり方や兄弟姉妹のあり方も、規範教育に含まれます。

規範教育において、特に重要なのは、性の神聖性、神秘性について教えることです。性は結婚を通じて初めて体験するものであって、それまでは決して冒してはならないのです。聖書によれば、神様はアダムとエバに「善悪を知る木からは取って食べてはならない」(創世記 2/17)といわれました。善悪の果はエバの性的愛(『原理講論』P103)を意味するために、「善悪の果を取って食べてはならない」ということは、性(性の器官)は神聖なものであって、性の領域を汚すことによって、性を冒してはいけないということの意味します。

この戒めはアダムとエバだけのものではなくて、現在も有効であり、未来にも有効な永遠なる天の至上命令なのです。これはまた男女が結婚したあとにも、他の異性との脱線行為をすることは決して許されないという至上命令です。したがって規範教育とは、第一に、神様の戒めを守りながら神様の陽陰の調和に似るようにするための教育、すなわち夫婦の資格を備えるための資格教育なのです。

理法的存在になるための教育

人間はロゴス(理法)によって創造されたために、規範教育はまた人間がロゴス的存在、理法的存在になるように、すなわち天道に従うようにするための教育であり、理法教育ともいいます。天道とは、宇宙を貫いて作用している法則であって、授受作用の法則のことをいいます。天道から自然法則と価値法則が導かれますが、そのうち価値法則が規範となるものなのです。宇宙に縦的秩序と横的秩序があるように、家庭にも縦的秩序と横的秩序があります。したがって家庭にはこの二つの秩序に対応する価値観、すなわち縦的価値観と横的価値観が成立するのです。そのほかにも個人的価値観があります。それについては、すでに価値論で述べられています。

規範教育は、心情教育と並行して行われなければなりません。規範教育そのものは義務だけを強要しがちだからです。規範とは、「……してはならない」とか、「……しなければならぬ」という形式で行為を規定するものであるために、そこに愛がなければ、その規範は形式化され律法的なものになりやすいのです。したがって、規範教育は愛の雰囲気の中で実施されなければならないのです。

規範のない盲目的な愛のことを一般的に溺愛といえます。そのような愛で子供に対すれば、子供は結局、分別力がなくなり父母や教師を軽視するようになります。父母の愛や教師の愛には、どこもなく権威がなくてはなりません。そのような愛はロゴスにかなった愛でなくてはならないのです。一方、愛は少なく、規範だけを強調すれば、子供は拘束感を感じて親や教師に反発するようになります。愛は規範の下にあるのではなく、上になければならないのです。したがって子供がたとえ規範を一、二度守らなかったとしても、温かい愛をもって許してやらなければならないのです。

愛はすべてを許し受け入れようとしますが、規範は厳しく規制しようとします。愛は円満で丸いのですが、規範は直線的で直線です。人間にいて、愛と規範の統一された人間は、縁と直線を統一したような人格者となります。すなわち人格者とは、最も円満でありながら厳しい面を统一的に備えた人というのです。このような人格を持つ人は、ある時にはとても優しく、またある時には非常に厳しくというように、時と場所に応じて、いつでもふさわしい態度を取ることができるのです。

それゆえ規範教育は心情教育と統一されなければならないのです。すなわち家庭と学校において、愛の雰囲気の中で子供の規範教育が実施されなければなりません。規範のために愛が冷えればその規範は形式化してしまうからです。

(三) 主管教育(知識教育、技術教育、体育)

主管性完成のための教育

主管教育は主管性完成のための教育です。主管性完成のためには、まず主管の対象に対する情報、すなわち知識を習得しなければなりません。そのために、まず知識教育(知育)が必要なのです。次に、対象を主管するのに必要な創造性を開発するための技術を習得する教育も必要です。そのような教育が技術教育(技育)です。そして主管をよくするには、主管の主体である人間の体力を増進させなければなりません。そのための教育が体育です。以上の知育、技育、体育を合わせて主管教育といえます。

知識教育において、主管に必要な知識を学ぶのですが、それは主管の対象の領域によって、自然科学をはじめ、政治、経済、社会、文化など、広範囲の分野にわたっています。それらはみな、万物主管の概念に含まれるのです。技術教育において、習得する技術は万物主管の直接的な手法として主管教育の中心となるのであり、体育における体位の向上と体力の増進も、万物主管に肝要なのはもちろんです。そして技術教育や体育には、さらに細分された専門分野があります。芸術教育すなわち芸能教育も、一種の技術教育と見なすことができるのです。

要するに、主管教育は、創造性を発揮するための手段を学ぶものです。創造性は天賦のもので、人間には誰でも先天的な可能性として備わっているのですが、これを現実的に発揮するためには主管教育が必要なのです。

創造性の開発と二段構造の形成

創造性を開発するとは、要するに神様の創造の二段構造に倣って内的四位基台形成の能力を増大させ、外敵四位基台形成の熟練度を高めることを意味します。

内的四位基台の形成能力とは、ロゴスの形成能力、すなわち構想の能力をいいます。そのためには知識教育を通じて知識を多く獲得して、内的形状(観念、概念など)の内容を質的、量的に高めなければなりません。得られた知識(情報)が多ければ多いほど構想は豊富になります。ロゴスを形成するとは、いわゆるアイデアを開発することであり、産業における技術革新(イノベーション)も、絶え間ないロゴスの形成の反復によってなされるのです。

次に、外敵四位基台形成の能力とは、一定の構想に従い、道具や材料を用いて、その構想を実体化する能力を高めること、すなわち外的授受作用の熟練度を高めることをいいます。そのためには技術教育が必要となります。また身体的条件が必要であることはいうまでもありません。したがって、体育による体力の増進も必要なのです。

普遍教育を基盤とした主管教育

主管教育は心情教育および規範教育を基盤として、それらと並行して行われなければなりません。知識教育や技術教育や体育は、心情(愛)と規範に基づいて初めて健全なものとなり、創造性が十分に発揮されるようになるからです。

心情教育と規範教育は、全人類が共通に受けなければならない教育であるので、普遍教育といえます。それに対して主管教育は、個人の資質によって学ぶ領域です。ある人は自然科学、ある人は文学、またある人は経済学を専攻するということに、原則的に個別教育となります。

ここで普遍教育と個別教育は、性相と形状の関係にあるといえます。心情教育と規範教育は精神的な教育、すなわち心を対象とする教育であり、主管教育は万物を主管する教育だからです。したがって普遍教育(心情教育、規範教育)と個別教育(主管教育)は主体と対象の関係において、並行して行われなくてはならないのです。それが均衡教育(balanced education)なのです。

ギリシャ時代や中世、近世には、たとえ完全なものではなかったとしても、愛の教育があり、倫理・道徳の教育がありました。しかし今日では、それらがほとんど無視されるようになって、ほとんどの場合、知識偏重、技術偏重のいわゆる不均衡教育が行われるようになったのです。その結果、人間性の健全な成長が妨げられているのです。そこで、新しい教育論が現れて、新しい次元において、真の愛の教育、倫理・道徳教育を行わなければならないのです。そしてその基盤の上で知識教育と技術教育が行われるべきなのです。そのような均衡教育が実施されるとき、初めて科学技術は善なる方向に向かっていくようになります。そうすれば公害問題や自然破壊などの問題も自然に解決していくことでしょう。また教師たちも、そのような教育を通じて教師としての権威を取り戻すことができるようになるのです。

ここで付記すべきことは、教育の原点は家庭教育にあるということです。家庭教育の延長、拡大、発展したものが学校教育です。したがって、家庭教育と学校教育が一体とならなければならないのです。そうでなければ、普遍教育としての心情教育と規範教育はそのままでは成立しにくく、したがって教育の統一性は期待されにくいのです。

三 被教育者の理想像

歴史始まって以来、今日まで多くの学者たちによって、いろいろな教育論が発表されてきました。また、それぞれの教育の理念に応じて養成される人間像というものがありました。統一教育論においても、やはり教育によって養成される人間の理想像があります。統一教育論における被教育者の理想像とは、第一に人格者、第二に善民、第三に天才です。それぞれ心情教育、規範教育、主管教育に対応した理想像です。したがって教育を理想的人間像という面から見れば、心情教育は人格者教育、規範教育は善民教育、主管教育は天才教育といえます。

人格者教育

人格者とは心情教育によって形成される人間像です。したがって人格者教育とは、被教育者をして神様の心情を体恤し、日常生活において神様の愛を実践するように指導し、人格者として育てるための教育です。心情は愛の源泉であり、人格の核心です。心情(愛)が乏しければ、いくら知識をたくさんもっていても、いくら体力があっても、いくら強大な権力があっても、人格者とはなりえないのです。世俗的概念では、人格者とは一定の徳性と知識と健康を備えた人間をいうのですが、統一思想において、人格者とは神様の心情を体恤し、愛を実践する人をいうのです。

それでは理想的な人格者の姿は、果たしていかなるものなのでしょうか。それは心情(愛)を基盤として、知情意の機能が均衡的に発達した全人的品格を完成した人間をいいます。人格者は何よりも神様の心情を体恤しながら生きるために、万人と万物に対していつも真の愛を実践しようと努力します。神様に対しては忠孝の真心で神様の悲しみと苦痛を慰めてあげようとするのであり、神様の怨讐に対しては公的な敵愾心すなわち公憤心をもちながらも、神様の真の愛を受け継いで涙ながらに怨讐を許すのです。普段は溫柔、謙遜の徳と温情にあふれる姿勢をもって、縦的、横的価値観を実践します。法道と愛の実践者であるので、他人に対しては最も優しく、自分に対しては最も厳しいのです。対人関係においては、愛と法道の統一を生活化します。法道のない愛は子供を懦弱にし、愛のない法道は拘束感だけを与えるからです。これが心情教育に寄って形成される人格者の姿です。一言で表現すれば、人格者とは万人と万物に対して神様の真の愛を実践する人です。

善民教育

善民とは性品が善なる国民であるという意味であって、規範教育において形成される人間の

理想像です。規範教育は普通、学校で行われますが、その基盤は家庭にあります。家庭は宇宙秩序の縮小体であり、社会、国家、世界は家庭の秩序体系を拡大したものとなっています。したがって、家庭において規範教育をよく受けた人は、社会、国家、世界における規範生活をよく行うことができるのです。そのような人は、善なる家庭人でありながら、善なる社会人であり、善なる国家人であり、善なる世界人となるのです。すなわち、規範教育を通じて善なる家庭人となれば、社会、国家、世界など、どこにおいても、その時、その時の規範にふさわしい行動をするようになるのです。

なお地上において善民として生活すれば、霊界に行っても同様に善ある霊界人となります。地上においても霊界においても、善ある生活をする善民を善なる天宙人といいます。家庭、社会、国家、世界、天宙における善民の生活がすなわち天国における生活なのです。

天才教育

主管教育によって形成される人間の理想像が天才です。天才とは創造性の豊かな人をいいますが、人間は本来みな天才なのです。なぜならば人間はおおよそ、神様の創造性を与えられた創造的存在だからなのです。「天才」という言葉そのものが「天が与えた才能」という意味であり、神様の創造性を受け継いだことを意味するのです。つまり人間は生まれた時から、可能性として神様の創造性を与えられているのです。したがって先天的に欠陥を持って生まれた人を除けば、すべての人間は、与えられた創造性を100%発揮すれば、天才となるのです。しかし創造性をそのごとくに発揮するためには教育が必要です。その教育が主管教育なのです。

これまでに述べてきたように、主管教育は心情教育と規範教育を基盤として並行して行われます。すなわち主管教育は均衡教育の一環として行われなければならないのです。そうするとき、初めて真の創造性が現れるのです。心情教育や規範教育が不十分であるか、全く行われないなら、創造性は十分に発揮されません。例えば音楽的な創造性をもった子供がいて、ピアノ習っているとします。ところが父母がいつも不和であって、子供にツ冷たくあつたり、虐待したりすることが多い場合には、その子は心情的に傷を受けながら学校に通うこととなります。そうすると、ピアノを弾いても、手が思うように動かないのです。感情が不安な状態でピアノ弾くからなのです。そういう子供は、どんなに立派な音楽家としての創造性を可能性としてもっていても、不和な家庭環境のために、その創造性の発揮が妨げられているのです。

人間には個性が与えられているので、創造性にも特性があります。ある人には音楽的な創造性が、ある人には数学的な創造性が、ある人には政治的な創造性が、またある人には事業的な創造性が与えられているのです。そして各人が自分に与えられた創造性を十分に発揮すれば、音楽の天才となり、数学の天才になり、政治の天才になり、企業経営の天才になるのです。すなわち各人は個性にかなった特有の天才になり得るのです。

しかし人間は墮落した環境に住んでいるために、神様から授かった創造性を十分に発揮できなくなり、天才になりにくい状況になってしまったのです。現実には数万人に一人が天才になれる程度であって、大部分の人間はみな凡才にとどまるしかないので、これが、墮落した社会における主管教育の一つの側面です。

さらに天才教育において、霊界の協力を受けるようになります。ことに神様を中心とした家庭を基盤として均衡教育を行えば、善霊たちが霊的に協力をするために、子供の天才的素質はすみやかに発揮されるようになるのです。

四 従来の教育観

次に、従来の代表的な教育観の要点を紹介します。従来の教育観と統一教育論を比較することによって、統一教育論の歴史的な意義がさらに明瞭に示されるためです。

ギリシャの教育観(プラトンの教育観)

プラトン(Platon,427-347 B.C.)によれば、人間の魂には情欲的部分、気概的部分、理性的部分の三つの部分がありますが、情欲的部分の徳を節制、気概的部分の徳を勇氣、理性的部分の徳を知恵といいます。そして、この三つの徳を調和せしめるときに現れる徳を正義といいます。国家にはこの魂の三つの部分に対応する三つの階級があります。農・工・商の庶民は情欲的部分に対応する下級階級であり、軍人・官吏は気概的部分に対応する中間階級であり、哲学者は理性的部分に対応する上層階級であるとされたのです。

善のアイデアを認識した哲学者が国家を統治するとき、初めて理想国家が実現されるとプラトンは考えたのでした。プラトンにおいて教育の目的は、人々をアイデアの世界に導くことでした。それは少数の支配階級たる哲学者を養成する教育でした。理想的人間像は「愛智者(哲学者)」であり、同時に、心身が調和し、知恵、勇氣、節制、正義の四徳を兼備した「調和的人間」であったのです。そして教育の究極的な目的は、善のアイデアが実現した理想国家を実現することだったのです。

中世キリスト教的教育観

ギリシャ時代の教育が、社会に奉仕する善なる人間を目標としていたのに対して、中世のキリスト教社会においては、キリスト教を理想とする人間の育成を目標としました。神様を愛し、神様を敬い、隣人を愛する「宗教的人間」が理想的人間像だったのです。特に修道院において、そのような人間像を目指す厳格な教育がなされましたが、それは純潔、清貧、服従を徳として、完全な靈的生活を営もうとする教育でした。すなわち、教育の目標はキリスト教的人間の育成であると同時に、来世意の生活に対する準備でもあったのです。

ルネサンス時代の教育観

ルネサンス時代に入ると、服従や禁欲を徳とした神本主義の世界観を打ち破って、人間性の尊厳を重んじる人本主義の世界観が出現しました。人本主義の教育観を代表するのがエラスムス(D.Erasmus,1465-1515)でした。教育の目的は、本性的に自由人である人間をして、その人間性の完全な発達を遂げさせることであり、個性的な、豊かな教養を身につけさせることを説きました。そして文学、美術、科学などの人文的教養を強調しました。また、中世において無視されていた体育にも関心をもつようになりました。ルネサンス時代の理想的人間像は心身が調和的に発達した「万能の教養人」でした。エラスムスの人間本性への復帰の思想は、コメニウスやルソーへと引き継がれてゆきました。

コメニウスの教育観

コメニウス(J.A.Comenius,1592-1670)において、人生の究極の理想は、神様と一つになって来世において永遠の幸福を得ることであり、現世の生活はそのための準備だということです。そのために人間は、①すべての事物を知り、②事物および自己を統制することを知る者となり、③神様の似姿にならなくてはならないとして、知的教育、道徳的教育、宗教的教育の三教育の必要性を説いたのです。「あらゆる人にあらゆることがらを教える」ことが、コメニウスの教育論の主題であり、この教育思想は汎知主義(pansophia)と呼ばれました。

コメニウスは、教育によって達成される素質は本来、人間に内在するものであり、この内在する素質すなわち「自然」を引き出すことが、教育の役割であると考えたのです。コメニウスはまた、教育は本来、父母が責任をもつべきものでありますが、それができない場合、父母に代わって学校が必要になるといったのです。

コメニウスによれば、理想的人間像は神様と自然と人間に関する真なる知識のすべてを知つ

た「汎知人」であり、教育の目的はすべてを知った実践的なキリスト者を育成し、キリスト教による世界の平和統一を実現するということでした。

ルソーの教育観

啓蒙時代の人物であるルソー(J.J.Rousseau,1712-78)は『エミール』という教育小説を著し、「[人間]万物をつくる者の手をはなれるとき、すべてはよいものであるが、人間の手につるとすべてが悪くなる」と述べて、子供を自然のままに教育することを主張したのです。人間は本来、内在する「自然の善性」をもっているから、それをそのままの姿で開発すべきであるということです。人間の自然能力の開発に対して妨害となる要因—既成の体系的文化や道徳的・宗教的観念の注入—を除去しながら、人間を自然のままに成長させていくというのが、ルソーの主張する教育なのです。ところが現実の墮落した社会において、自然のままの人間は社会には適応できません。しかし、理想的な共和制社会では自然のままの人間と社会の中の市民は両立すると考えて、社会人教育の必要性も説いたのです。

ルソーの教育観における理想的人間像は「自然人」であり、教育の目的は自然人を育成し、自然人が市民となる理想的な共和制社会を実現することでした。ルソーの教育観は、カント、ペスタロッチ、ヘルバルト、デューイなどに受け継がれてゆきました。

カントの教育観

カント(I.Kant,1724-1804)は、「人間は教育されなくてはならない唯一の被造物である」、「人間は、教育によってだけ人間になることができる」といって、教育の重要性を説いたのです。教育の使命は、人間の自然的素質を調和的に発達せしめ、道徳律に従いつつ自由の行動しうる人間を養成することにあります。そこにはルソーの影響がありました。またカントは、教育は特定の社会に順応することを目標とするのではなくて、一般に人間そのものの完成を目標として、世界主義的でなくてはならないと主張したのです。

一方でカントは、人間の本性には根本悪があることを認めていました。悪とは、道徳律を自己愛に従属させることによって成立するものでした。ゆえに内的に転換(回心)によって、道徳律を上位におかなくてはならないといい、義務がそうであることを命じているといったのです。道徳律の尊重、科学への信頼、そして神様への畏敬がカントの教育観・人間観の特徴でした。カントにおいて理想的人間像は「善なる人」であり、教育の目的は世界主義的な人間性の完成であり、究極には国際的な永久平和の確立でした。

ペスタロッチの教育観

ペスタロッチ(J.H.Pestalozzi,1741-1827)は、ルソーの影響のもとに、「自然」に即した教育を主張し、人間に内在する高貴な素質である人間性を解放しようしました。単純なもの、純粋なものを基礎としながら、根本原理を直感することによって、人間は善の行いをするようになると彼は考えたのです。そして教育は家庭における母の愛から始まるとし、家庭教育が教育の基礎になると主張したのです。

ペスタロッチは人間性を構成するのに、三つの根本力、すなわち精神力、心情力、技術力があるといい、それぞれ頭、心臓、手に相当すると考えたのです。そして精神力の教育が知識の教育であり、心情力の教育が道徳・宗教教育であり、技術力の教育が技術教育(体育を含む)であるとしたのです。これらを統一する内的な力が愛なのです。愛は心情力の基本であり、道徳・宗教教育の推進力です。したがって道徳・宗教教育を中心として、この三つの教育は調和的に統一されると主張したのです。

ペスタロッチの考えた理想的人間像は三つの根本となる力が調和的に発達した人間、すなわち「全人」でした。彼は愛と信仰を中心とした全人格的教育を主張したのです。教育の目的

は、人間を陶冶し、道徳的・宗教的な国家社会を建設することでした。

フレーベルの教育観

ペスタロッチを信奉し、ペスタロッチの人間教育を体系的に構成したのがフレーベル(F.Froebel,1782-1852)でした。フレーベルによれば、自然と人間は神様によって統一され、神様の法則によって動いているというのです。神様が万物の本性を形成しており、その本性を表現し、啓示し、発展させることが万物の使命なのです。したがって、人間は人間に内在する神性を生活の中に現さなくてはならないのであり、教育はそのような方向に導くものとなるのです。彼は、次のように述べています。「このような神的なものの表現こそ、まさにすべての教育、すべての生命の目的であると共に、努力の目標であり、同時に人間の唯一の使命なのである」。

フレーベルは、特に幼児教育と家庭教育の重要性を強調しました。幼児を自然のままに成長させる場所は家庭であり、教師は父母であるというのが、フレーベルの主張する教育の基本なのです。そしてペスタロッチと同様に、母の役割を強調しました。また、家庭の教育を補うために幼稚園(Kindergarten)が必要であると主張し、幼稚園の創始者となったのです。

ルソーの唱えた善性をもつ「自然人」は、ペスタロッチに至ると高貴な人間性をもつ「全人」となりましたが、フレーベルにおいて、理想的人間像は「神性をもつ人間」となったのです。

ヘルバルトの教育観

ヘルバルト(J.F.Herbart,1776-1841)は教育学を科学的に体系化しようとしたのですが、その際、倫理学と心理学を基礎科学として取り入れようと試みました。すなわち倫理学を基礎として教育の目的を、心理学を基礎として教育の方法を打ちたてようとしたのです。

まずヘルバルトは、カントに倣って理想的人間像を「善なる人間」とし、教育の目的を道徳的品性の陶冶であるとしたのです。次に、心理学の立場から教育の方法を追求しました。ヘルバルトは、人間の精神生活の基礎をなすものは「表象」であり、表象の集合である「思想圏」(Gedankenkreis)を陶冶することによって、道徳的品性が陶冶されると考えたのです。つまり知識を教授し、それによって道徳的品性を形成しようとしたのです。

ヘルバルトは表彰の形成にあたって、教えること、すなわち教授(Unterricht)の重要性を指摘し、教授の過程について説明しました。ヘルバルトの理論をのちに修正したヘルバルト学派によれば、教授の過程は予備、提示、比較、総括、応用の五段階でした。

デューイの教育観

十九世紀の後半に、アメリカでは行動を人生の中心におくプラグマティズムの人生観が生まれました。デューイ(J.Dewey,1859-1952)は、知性は行動に役立つ道具であり、思考は人間が環境を統制する努力の過程で発展すると主張し、道具主義(instrumentalism)を唱えました。

デューイは「教育は成長することと全く一体のものであり、それはそれ自体を越えるいかなる目的もたない」といい、あらかじめ提示されるような教育の目的を否定し、成長としての教育を主張しました。教育とは生活上の通信(communication)による伝達(transmission)であり、「経験を絶え間なく再組織(reorganization)ないし改造(reconstruction)することである」といいます。そして伝達は、直接、成人(教師)から子供にというのではなくて、環境という媒介物を通してなされなくてはならないと言ったのです。このような教育によって社会は発展していくというのです。デューイが意図したのは、社会の改造を目指す実践的な技術教育でした。デューイの教育観における理想的人間像は「行動的人間」でした。

共産主義の教育観

マルクスやレーニン、資本主義社会の教育を次のように鋭く批判しています。マルクスによ

れば、ブルジョア社会の教育政策は愚民化政策であり、教師たちは企業の致富のために児童の頭脳を加工する生産労働者であるのです。レーニンによれば、資本主義教育は「ブルジョアジーの階級的な支配の道具」であり、「ブルジョアジーのための服従ですばしい従僕、資本の意志の執行者、資本の奴隷」を育てることを引き受けているというのです。

そのような資本主義社会の教育に対してレーニンは、社会主義社会では「学校はプロレタリアートの独裁の道具とならなければならない」と主張し、教師は労働者大衆に共産主義の精神を植え付ける軍隊とならなければならないといったのです。

共産主義教育の目的は「国民教育基本法」(1973年)の前文に次のように示されています。「ソ連邦の国民教育の目的は、マルクス・レーニン主義の思想で育てられ、ソビエト法と社会主義秩序の尊重、労働に対する共産主義的態度の精神で育てられた、高い教養をもち、全面的に発達した共産主義社会の積極的な建設者の育成である」。すなわち教育の目的は、共産主義社会の建設に献身的な人間を育成することなのです。そして理想的人間像は「全面的に発達した人間」でした。

それでは共産主義教育は、いかなる内容をもっているのでしょうか。まず個別的な技術教育に反対し、総合技術教育(ポリテフニズム)を重視します。そして総合技術教育は労働と結びつけてなされなければならないと主張するのです。さらに社会主義社会では個人と集団に利害の対立はなく、また集団を離れた個人はありえないとして、集団主義教育の必要性を主張するのです。総合技術教育を体系化したのがクルプスカヤ(N.K.Krupskaya,1869-1939)であり、集団主義教育を体系化したのがマカレンコ(A.S.Makarenko,1888-1939)でした。

民主主義の教育観

民主主義の教育理念とは、民主主義思想に基づいた教育の考え方なのですが、民主主義教育観の形成に対して、デューイの教育観が二十世紀の前半を通じて大きな役割を演じました。ここでは第二次世界大戦後の民主主義の教育理念を代表するものとして、「アメリカ教育使節団報告書」から、次の内容が引用します。まず民主主義とは何かということについて、次のように述べられています。

民主主義とは、宗旨ではなく、人間の解放された力をあらゆる多様性の中で発揮できるようにするための有効な手段なのです。民主主義をもっと良く理解するためには、それは、どんなに輝かしいものであれ、遙か彼方の目標としてではなく、現存するすべての自由の浸透的な精神としてとらえなければなりません。責任は、この自由の本質をなすものです。義務は、権利が互いに相殺することを防ぎます。分れたる権利にであれ、背負われる義務についてであれ、平等な取り扱いの吟味は、民主主義の根本なのです。

そして民主主義教育について次のように述べています。

民主主義の生活に適応した教育制度は、個人の価値と尊厳との認識をその基本とするでしょう。それは、各人の能力と適性に応じて、教育の機会を与えるように組織されるでしょう。教授の内容および方法を通じて、それは、学問の自由、批判的に分析する能力の訓練を大切にすることでしょ。それは、異なった発達段階にある生徒の能力の範囲内で、事実に知識についての広範な討論を奨励するでしょう。これらの目的は、学校の仕事があらかじめ規定された教科過程や、各教科についてただ一つだけ認められた教科書に限定されていたのでは、遂げられることはできません。民主主義における教育の成功は、画一性や標準化によって測られることはできないのです。教育は個人を、社会の責任ある、協力的な一員となるよう準備しなければなりません。

民主主義の教育理念はこのような民主主義の原理を遵守しながら、そして自らの人格完成を目指しながら、他人の人格を尊重し、自己の責任と義務を果たしたうえで、自己の権利を主張する市民、すなわち民主的市民を養成することです。そして教育の目的は、人格の完成をなさしめ、社会の責任ある成員を育成することであり、民主主義教育の理想的人間像は「尊厳なる個人」なのです。

五 統一教育論から見た従来の教育観

それでは従来の教育論を統一思想の立場から評価してみます。

プラトンは善のアイデアを認識した哲学者を理想的人間像として、そのような哲学者が国家を統治すれば、理想国家が実現されると考えたのです。しかしギリシャ時代において、国家を統治しようとする哲学者は現れず、また善のアイデアは国家(ポリス)において実現されなかったのです。善のアイデアの思想が漠然としていたからです。神様が宇宙と人間を創造された目的が明らかにされない限り、善の基準を定めることはできず、したがってその理想を実現することはできないのです。

中世のキリスト教は神様を愛し、隣人を愛する人間となるように教育するとしてきましたが、その愛とはアガペー的な愛であって、十字架上のイエス様の犠牲の愛でした。しかしなぜ神様の愛はそのような犠牲の愛でなければならないのか、そしていったい、人間はなぜ愛さなければならないのか、明らかにされていなかったのです。したがってそのようなキリスト教の教育観では、人間性に目覚めた近代人を確信をもって導くことは難しかったのです。

ルネサンス時代の教育は抑圧されてきた人間性を解放した点においては高く評価されますが、十六世紀の中ごろからは、古典を学習することに限られ、教育は形式化していったのです。また人間中心に偏ったために、被教育者は次第に宗教的な道徳性を失っていったのです。

コメニウスは人間の内在する素質(自然)を引き出すことが教育の役割であるといいましたが、その内在する素質とはいかなるものなのかというのが、明確ではなかったのです。また真なる知識を得れば、それがそのまま徳と信仰につながるという汎知主義には問題があります。統一思想から見れば、真の知識教育は心情教育と規範教育を基盤として初めて成立するからです。しかしコメニウスの主張した三つの教育は統一教育論の心情教育、規範教育、主管教育に通じるものであるといえます。

ルソーも人間を自然のままに成長させることを主張しましたが、ルソーのいう人間の「自然」も曖昧だったのです。人間の性質を無条件に善と規定したところも問題でした。神様の心情(愛)を中心とした心情教育と規範教育を施さなければ、いかに自然のままに育てるといっても、本来の人間の姿に成長させることは不可能なのです。

カントは道徳教育に重点を置きましたが、その道徳教育には確固たる基盤がありませんでした。道徳の基盤となるべき神様は要請されるだけの存在にすぎず、実在しているのかどうかというのが曖昧だったためなのです。またカントにおいては個人的規範としての道徳のみが問題にされていますが、それだけでは不十分なのです。人間相互の規範としての倫理も重要だからです。

ペスタロッチは知識教育、道徳・宗教教育、技術教育の三つが愛によって統一されなくてはならないと主張しましたが、これは統一思想のいう心情教育を基盤とした規範教育、主管教育の考え方と似ています(ペスタロッチの知識教育と技術教育は統一思想の主管教育に相当し、道徳・宗教教育は規範教育に相当します)。また全人格的教育という考え方も、家庭が教育の基盤であるという考え方も、統一教育論と一致しています。しかし、教育の目的が三大祝福の完成にあるということが明確にされていませんでした。また道徳・宗教教育の根拠となる神様に関する理解が十分ではなかったのです。そのために、ペスタロッチの教育理念も確固たるもの

となりえなかったのです。

ペスタロッチの教育論を継承したフレーベルに対しても、同様なことがいえます。フレーベルは理想的人間像を「神性をもつ人間」としましたが、これは神様に似るように人間を成長せしめることが教育の本質であるとする統一教育論の立場と全く一致しています。

ヘルバルトは観念(表象)とその相互関係が、感情や意志などのあらゆる精神活動を起こす根源であると考えて、思想圏を陶冶することによって道徳的品性が実現されると主張しました。しかし統一思想から見ると、思想の陶冶によって道徳性が実現されるわけではありません。心情(愛)を中心として、善の価値を追求し、規範を守ることによって、道徳性が実現されるのです。

デューイは教育に目的を認めず、ただ成長と進歩を強調しました。しかし目的が明確に設定されないまま、成長や進歩を主張しても、人間の本性の疎外や社会問題は解決されません。実際、科学文明の発達とともに、今日、デューイの教育法が実施されたアメリカで社会では、多くの社会的な病弊が生まれてきたのです。デューイの目指した実践的な技術教育は、心情教育と規範教育の裏づけがない限り、健全な人間と社会を形成することはできないのです。

マルクス・レーニン主義のいう「ブルジョアジーの階級的支配」としての資本主義教育や、「プロレタリアートの独裁の道具」としての共産主義教育は、階級闘争という面から社会を見つめた教育観にすぎません。唯物弁証法や唯物史観が間違っている以上、この理論の上に立てられた共産主義の教育観も間違っているのです。また、マルクス・レーニン主義は「全面的に発達した人間」を目指すと主張しましたが、それは知情意の機能が均衡的に発達した人格をいうのではなくて、いかなる労働でもなしうるように、労働者の労働の能力を全面的に発達せしめることを意味していました。また労働と結びついた総合技術教育を主張しましたが、労働に重点を置いた教育であるために、総合技術教育は単なる労働技能の教育になってしまったのです。また集団主義教育は個性の尊厳性と人間の自由を抑圧する結果をもたらしました。

終わりに、民主主義教育は個人の価値と尊厳を基本としたものですが、個人の権利を尊重するあまり個人主義、利己主義の風潮を生みました。また人道主義に基づいて人間性を主張しているので価値観が相対的になってしまったのです。その結果、社会の混乱が不可避となったのです。神様の絶対愛に基づいた心情教育と規範教育がなされると、初めて個人の価値と尊厳性が確固たるものとなり、社会の調和と秩序が保たれるのです。